



Title	生活環境づくりを基盤にした幼児教育の原理と教育実践：札幌トモエ幼稚園の事例に注目して
Author(s)	宋, 美蘭
Citation	子ども発達臨床研究, 14, 71-81
Issue Date	2020-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.14.71
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77552
Type	departmental bulletin paper
File Information	080-1882-1707-14.pdf



資料論文

生活環境づくりを基盤にした幼児教育の原理と教育実践

— 札幌トモエ幼稚園の事例に注目して —

宋 美蘭

Principles and Practice of Early Childhood Education Based on Creating a Living Environment: Focusing on the Activities of Sapporo Tomoe Kindergarten

Miran SONG

1. 問題と目的

本稿の目的は、札幌市にある「札幌トモエ幼稚園（以下、T 幼稚園）」に注目し、幼児教育における子どもの発達を保障する視点として大切とされる、「生活環境づくり」実践に着目し、その原理および実践内容を明らかにすることである。

ここで言う、「生活環境づくり」とは、地域と幼稚園を基盤に、子どもを中核とした大人たちの繋がり、子どもと大人の繋がり、さらには子どもと子どもの繋がり、「共同づくり」とその繋がりが響き合う「協同づくり」の「社会共同体」実践を意味する。

幼児教育とは、周知のように、狭義の意味では、「幼稚園などの施設で行われる教育」であり、広義の意味では、「施設での教育に限定せず、家庭や地域社会での教育もすべて含む」教育とされている。また、日本の教育基本法（2006 年）第 11 条では、幼児期の教育とは、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国および地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によっ

て、その振興に努めなければならない」と定められている。このことは、単なる小学校の準備教育としての教育を指しているのではなく、「生涯にわたる人格形成を見据える」意味としての教育を指していることが見て取れる。

2008 年度幼稚園教育要領を見ると、幼稚園教育においては、その幼稚園教育期間全体を通して、幼稚園の目的・目標に向かう教育の筋道を明確にしながら、幼児が充実した生活を展開できるような“教育課程”を編成して教育を行う必要があることと示されている（文部省 2008）。その目的の中に、「義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長すること（学校教育法）」と明記されている。また、幼保連携型認定園における就学前の子どもに関する教育目的には、地域における創意工夫を生かすことや、小学校就学前の子どものたちに対する子育て支援を総合的に提供することを推進するための措置を講じ、地域において子どもが健やかに育成される環境の整備に資することが示されている（幼保連携型認定こども園内閣府）。

このように幼稚園教育においても幼保連携型認定園の目的においても幼児教育には「地域」の重要性が指摘されている。

子どもの発達とその保障において、幼稚園・学校と地域が相互に連携・支援しあうことは、学校の教育は充実し、地域もまた活性化に繋がることになり、以前から学校と地域とのかかわりは深いものがあった。大田（2017）は、子どもたちが、「地域の生活改造の問題をもっとも適確にときほぐしうように学校の構成、経営が行われる」ことを理想であると指摘した上で、学校は、「子どもによって行われる地域社会改造、発展のための共同体として仕組まれなければならない」と、述べられている（大田 2017）。このように幼児教育を含む学校教育における子どもの発達とその保障は、地域を基盤としながら、本来は、社会構想の一つのモデルの中で、地域社会とともに進めてきたけれども、地域社会の希薄化、人口減少、さらには、新自由主義や競争教育原理が社会や学校に浸透することによって、学校と地域の分断が生じ、また、あらゆる社会的負の病理を生み出してしまった。

本稿では、子どもの発達とその保障を「生活環境づくり」実践の中において実現を目指し、幼児教育実践と生活づくり実践の統合を目指している、T幼稚園に注目する。とりわけ、その実践の核となる「生活環境づくり」が具体的にどのような構想を描き、幼児教育の実践として展開されているのか、その「生活環境づくり」実践の原理となる特徴を明らかにすることである。その際に、T幼稚園から提供されている「指導計画書」と、2020年

の新年父母及びスタッフ研修会（1月8日から10日まで）の際の傍聴資料および講義内容に即して分析検討することにする。

2. T幼稚園の概要と沿革

本稿が対象とするT幼稚園は、札幌市M区に位置している。園の周辺には山に囲まれ、子どもたちが四季折々の自然にふれ合いながら、実体験を通して豊かな感性を培っていきけるような自然環境に恵まれているところに所在している。

T幼稚園のスタッフは、理事長兼園長をされているK氏を含む、計9名のスタッフが存在し、その内、男5名、女4名に構成されている。スタッフの勤務年数を見ると、一番長い教師で34年、そのほか22年から17年であり、一番短い人で5年である。また、教師の年齢構成については、園長80代をはじめ、教頭70代、主幹教諭60代、その他40代から50代となっている。以上に見るように、T幼稚園は、長い歴史のある園である事が見て取れる。T幼稚園のスタッフ（教諭）一人ひとり、豊かな自然の環境の中で、子どもたちの五感と素朴さを大切に、子どもたちが本来持っている力をよび覚ますことができる実践を働きかけながら、全力で日々の実践に臨まれているという。

園長のK氏は、徹底した子ども＝人間への深い理解と自己省察、何より幼児教育への深い思いと限りない子どもへの愛に満ちている。T幼稚園の沿革およびT幼稚園K園長の生い立ちとT幼稚園の誕生までの流れは、表の1を参照されたい。



* 左の写真は、T幼稚園の園舎、右は、園舎に囲まれている自然景色。今年は例年より雪が少ない園舎の風景。園児たちは冬休み中。（2020年1月8日筆者撮影）



T 幼稚園の理事長兼園長 K 氏。保護者研修会にて熱狂のレクチャーをされている様子

(2020 年 1 月 8 日撮影)

まず、T 幼稚園の園長 K 氏は、幼稚園を設立する前に、プロテスタントの教会にて洗礼を受け、その後、1969 年に北海道十勝士幌町にてプロテスタント教会の牧師として就任された。就任と同時に

教会附属幼稚園「愛光幼稚園」を設立した。幼稚園を運営する中で、幼児が持つ感性の素晴らしさに触発される一方で、教師間の子どもへの理解の捉え方の違いから、葛藤を感じ、幼児教育に携わる者としての責任と命に対する責任と尊さを改めて考えなおすことを心に決め、「幼児教育とは何か」を根本から捉えなおすようになる。このことを契機に、1974 年に幼稚園の鉄則の一つに、教諭同士が「協調」しながら生活できる環境づくりを最優先順位として掲げ、まずは、園舎の空間づくりの変革から始めたという。園舎のあらゆるところに壁のない空間づくりを目指し、園舎をオープンスペース化をして、教師も子どもも園に来る全ての人間が、オープンな心を持ち、幅広い人間関係が築いていけるような空間づくりに力を入れたと言う。

園長の K 氏はそのことを、次のように語られ

表 1 T 幼稚園の沿革と K 園長の生い立ちとその実践

1969 年	・北海道・十勝・上士幌町にあるプロテスタント教会牧師として就任と同時に教会附属「愛光幼稚園」園長に就任
1971 年	・幼児教育とは何かを根本から捉え直し、幼児の感性の素晴らしさと幼児教育者の責任の重さを知る
1974 年	・教諭が協調しながら生活する環境創りを見出す ・園舎をオープンスペース化 ・母親実習を制度化＝母親の参加に結びつく
1976 年	・米国の社会共同体と人間教育の研究視察を 2 ヶ月間行い、「日本人らしい共同体的な生活環境の必要性」を感じられ、その 4 年後に「生活環境づくり」実践を展開する
1979 年	・愛光幼稚園長を辞任＝牧師・附属愛光幼稚園の 10 年間で、現在の T 幼稚園の生活基盤を創る ・牧師国内留学
1980 年	・札幌市内のスキー場内のロッジ（12 月）で無認可幼稚園を創設 ・親が積極的に参加できる教育実践を展開
1981 年	・12 月に、学校法人盤溪学園ばんけい幼稚園認可・創設者・園長就任 ・家族（祖父母・親・兄弟）が自由に参加できる幼稚園の実践展開 ・大自然の中にオープンスペースの園舎を建設 ・8 名の教諭によるチームティーチング ・社会共同体的な生活基盤の創造を展開 ・親たちが主体的に参加し、母親の援助に力を入れる。講座や個人の相談による指導
1984 年	・『人が好きになる子育て・札幌ばんけい幼稚園の自由な教育』一光社出版
1985 年	・『黒ひげ園長のいきいきファミリー教育』491 アヴァンにて出版
1987 年	・教育実践写真展「人間回復のための人間教育」を東京にて開催
1988 年	・学校法人創造の森学園札幌トモエ幼稚園認可・創設、理事長・園長就任 ・自然体験型特認幼稚園として認可され、北海道札幌市で、学校法人 創造の森学園としてスタート ・オープンスペース園舎新設。10 名のスタッフによるチームティーチング
1990 年	・人間環境学会を創設し、「季刊誌・人間物語」刊行 ・『家族・家庭・家（夫婦・家庭の崩壊時代に思う）』エッセイを出版
1992 年	・『人が育つ町』、第 1 号から第 12 号まで発行
1999 年	・『いいものみつけた』写真集を父母自主出版
2001 年	・『創造の森の仲間たちー札幌トモエ幼稚園のファミリー教育ー』樹心社にて出版
2003 年	・『お母さんが輝く子育てのすずめー人間の素晴らしさを発見する教育』樹心社にて出版
2005 年	・文部科学省・人権教育研究指定校に認定

出所：T 幼稚園から提供された、「2020 年保護者・スタッフ研修会資料」から引用筆者再作成。

ている。

「まず、すべての空間を自在に生活＝共有しながらお互いの思いを理解する生活実践」を目指し、「乳幼児から在園・卒園家族も訪問できる生活＝校友の輪を広げる」こと。このことは、人間同士が、「お互いに認め合うことの心地よさを体験」することができるし、「こうした共有空間は、球体的

な思考が育っている」こと、すなわち、「共有感覚が自然に養われていく」と述べられ、園舎の壁のないオープンスペース化の空間づくりの目的について語られている。

また、T幼稚園長K氏は、社会共同体の実現と人間教育の研究のために、1976年にアメリカに渡米し、社会共同体を目指している実践現場を



園舎の室内にある多目的空間



子どもたちが登園すると、自由に精一杯遊ぶ空間。粘土をやったり、子ども同士でふざけたりする遊び空間。右にある写真は園の台所。お弁当を忘れた親が自由に材料を持ってきて料理する。また、美味しい材料を手に入れた時には、それを自らお料理をし、みんなと分かち合うと言う。



筆者がT幼稚園にいた時に、園長から「お弁当持ってきましたか？」と言われ、「いいえ、お弁当持ってきてませんでした」と言うと、「その前日の残り物ですが召し上がりますか？」と、ベテランのC先生（右）に優しく声をかけられ、遠慮なく頂いた愛の食事（左）。

視察見学を行なっている。その後、1979年に、10年間教会附属幼稚園として運営していた、「愛光幼稚園」をやめ、現在のT幼稚園づくりに臨むようになる。その後、1980年に、札幌市内のスキー場内のロッジ（12月）にて、無認可幼稚園を創設し、この時から、親も通える幼稚園の教育実践を目指し、展開している。

1981年12月に、学校法人盤溪学園ばんけい幼稚園が認可され、その幼稚園の創設者として、園長として就任される。園の教育方針は、「家族みんなが参加できる幼稚園」を目指されている。「大自然の中にオープンスペースの園舎」づくりをし、園を取り巻く地域を「社会共同体的」な生活基盤

を創造し、親たちが自由に、また主体的に参加できるようにすることや、子育てに悩む、励む、挑む母親に、多種・多方面にわたって子育て援助に力を入れられている。その具体的な実践の一つとして、幼児教育に関わる講座を積極的に開き、そこから得たものを保護者とスタッフとともに共有し、また議論を重ねながら子ども理解を深めていく。さらには、子ども理解にとどまらず、人間そのもの、すなわち親＝大人理解＝人間理解を探索し続けている。そのために、園長K氏は、あらゆる領域、例えば、教育、医療、福祉、哲学などに学び、また、それらの領域に従事している人を招き講演を開いたり、自ら出向いたりしながら、自己研鑽し、学ん

表2 T幼稚園の基本的指導計画

1日の流れ	1年間の主な体験学習	主な学習目標	指導上のポイント
< 10:00 > ・自発活動 ・個人学習 ・グループ学習	・室内コーナー ・野外遊具 ・山、川、丘、海などの大自然 ・登山、沢登り、ソリスベリ ・動植物、昆虫との触れ合い	・人との関わりによる人間理解 ・たて社会の人間関係 ・創意工夫し、自ら考える力を養う ・自発的・主体的に学習、自信を持たせる ・大自然の神秘性を感じられるようにする ・たくましい行動力を自然から学習 ・各コーナーでの知的、感覚的な学習 ・順応性を養う	・園児が自発的に行動できる環境を与え、自ら遊びを創造し、個人、グループ遊びへと発展するように導く。 ・自発性、創造性、主体性、協調性、順応性を養う。 ・自由遊びの中で友達関係を体験することで、正しい人間（理解）関係が身につくよう導く。 ・子どもの人間関係は、年々成長し、正しい社会性が生じる。（互いの人格を高め合う関係を創造する）
< 11:40 > 片付け 整理整頓	・全員で片付け、整理整頓	・年齢発達による公衆エチケット	・自分達の園舎であり、全園舎を自分が使用するため、全てを全員で整頓する。 ・年長児としての責任感を養う。 ・整頓できない子への注意
< 11:50 > 昼食	・食事準備 ・感謝 ・弁当 ・片付け	・テーブル拭きなど、自分達でする ・父母、働く人、弁当に感謝 ・後片付け	・両親への感謝 ・お弁当を作ってくださった方への感謝 ・私たちのために働いてくださる方への感謝
< 12:40 > 全体集会 課題学習	・うた、リズム ・お話 ・誕生会 ・お楽しみ Day の劇 ・絵画 / 制作 / 音楽 / 体操 / ゲーム / 自然観察	・全体での行動の責務を養う ・全員で話を聞く楽しさ ・誕生者の誕生を祝う ・教師の創作劇の観劇、子ども縁日等 ・色の調和、調合、線の持つ美しさを中心に体験 ・形の面白さ、楽しさの体験 ・自然の中の土や草や小枝を使い遊ぶ ・美しい音を聞く ・様々な音を聞く ・からだ全体を使って楽しむ ・四季の変化の美しさの体験	・集団行動の責務（話を聞く、うたう、体操） ・園全体の問題を考えるための導入 ・全員で誕生者の誕生を祝う ・自発活動への導入と発展 ・総合的な学習を習得する ・個々の成長、発達段階の把握 ・四季の変化を感覚で捉えるよう常に自然に触れる ・基本的な学習 ・選択課題学習
< 13:30 > 会話読書指導 (担当制) < 13:45 > お別れ < 14:00 >	・1日の出来事について話し合う ・明日への期待について話し合う ・読書、芝居 ・ゲーム、手遊び ・お別れのあいさつ	・楽しい体験、失敗について共に考え、分かち合う ・明日したいこと等、思考する ・父母や教師による本、紙芝居 ・園生活の個々の責任について話し合う ・四季の変化、からだの神秘について知る ・動植物、宇宙について知る	・楽しい体験を互いに分かち合う ・様々な問題について互いに考え、どうしたら問題が起こらないか話あう ・互いの問題について、注意できるように ・自己の考えを正しく伝えるように ・明日への期待を持たせる ・読書、お話、紙芝居

だ事を親とスタッフと共に学び考える時間を共有している。いわゆる、子どもを軸にした、「ホリスティックな教育研究」を目指されていることでも言える。

さらに、1984年からは、自らの実践を綴り、出版活動をも積極的に展開している。1984年からの出版物、写真集などの詳細は、表の1の通りである。また、T幼稚園は、2005年、文部科学省の「人権教育研究指定校」にも指定されている。

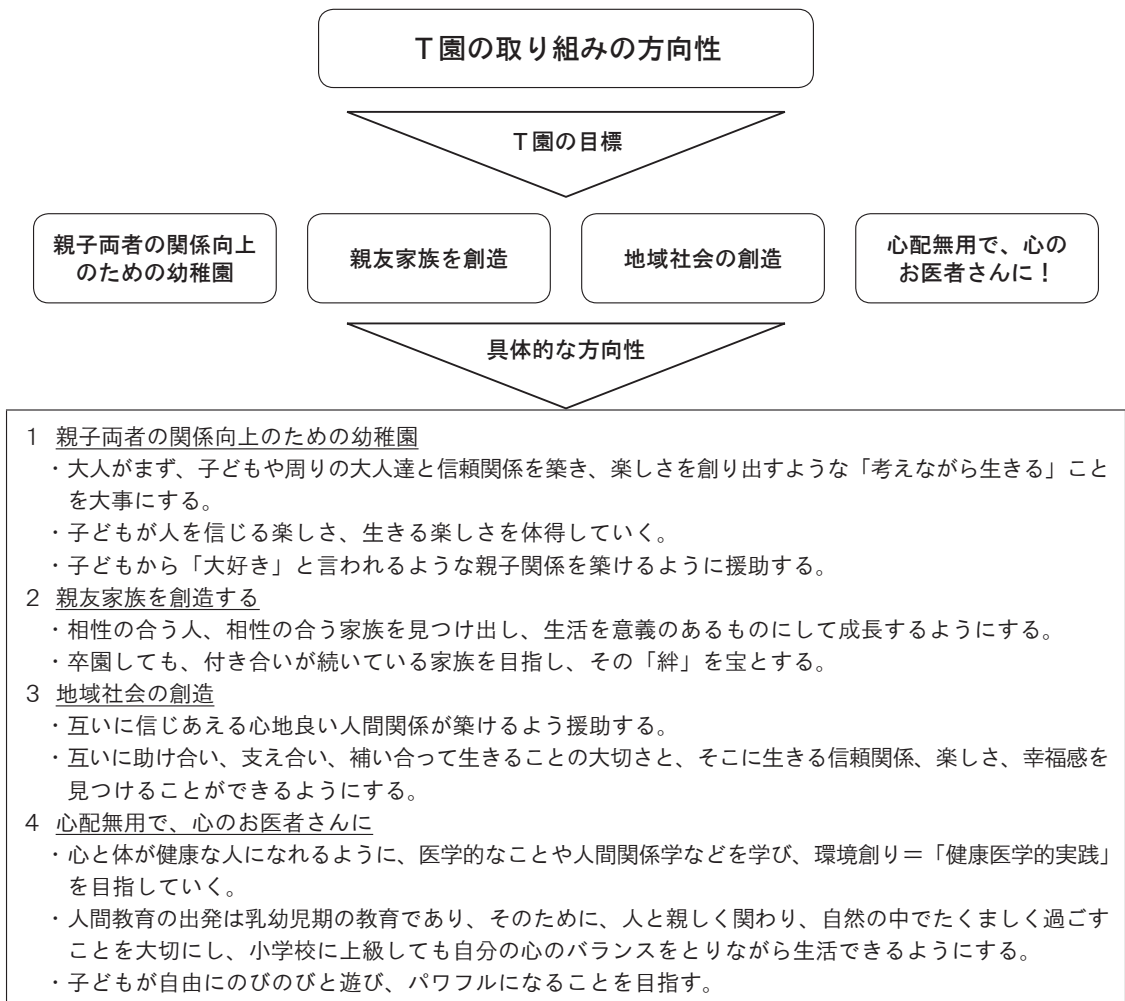
このような経緯を経て、具体的には、次に示す、T幼稚園における「基本的指導計画（表2）」と「幼稚園の取り組みの方向性（図1）」を展開しながら、「生活環境づくり」実践を核にした、幼児教

育実践と生活づくり実践の統合を目指している。具体的な内容は以下に述べよう。

T幼稚園の取り組みは、以下の図1に示す、大きく4つの目標を掲げている。その第1は、親子両者の関係性とその向上を掲げている。そして、第2には、親友家族を創造することである。第3に、地域社会の創造である。最後の第4に、「心配無用で、心のお医者さんに」なることを掲げている。

以上の4つの方向性を掲げ、地域を基盤としながら、子どもを中核においた、子ども・親・教師の3者間の有機的な関係形成の中で「生活環境づ

図1 T幼稚園の取り組みの方向性



出所：T幼稚園から提供された、T幼稚園の『教育要項』の資料から筆者再作成。

くり」実践が展開されている。また、K 園長は基本的な教育哲学・理念として、「一人一人が幸せでなごやかな生活ができるような人間生活の探求と実践」を目指し、「具体的実践・基礎的な人間関係（胎児・乳幼児と母親との関係研究）」も行なっている。

具体的な「生活環境づくり」実践は、以下に示す7つの大切なポイントとして集約することができる。

T 幼稚園の7つの生活環境づくり実践理念—親子が共に育つ創造家族—

1. 自分を知り、自分と人を好きになる生活
2. 素直に表現して自分を知る生活
3. 自己コントロールできる自分を創る生活
4. 生涯を創造的に生きるための力を身につける生活
5. 自然の中で人間の豊かな感性が育つ生活
6. 家族がいつでも参加して、過ごしやすい生活を共に創造する生活
7. 卒園家族も参加して、感性を養い続ける生活

以上の7つの生活環境づくり理念を掲げながら、具体的には次のような実践が展開されている。

まず、第1に、大家族的な人間関係による生活環境づくりを掲げている。T 幼稚園は、「親、教師が助け合って、子どもと共に豊かな感性を育て合える生活環境を日々つくろうとしている場」づくりを大切にしている。ここでは、「赤ちゃんか

ら祖父母まで、自由に参加できて、親も子も、相性の合う友達をつくることから人の輪を広げられるように考えている環境」づくりが特徴である。親自身が多くの人＝他人の子どもや大人に出会えることで、「孤育」することなく、楽しく子育てができ、またリラックスできるようになるという。

こうした多様な人との繋がりとその繋がりによって輪を広げる実践は、幼児も多くの大人＝親と関わることになり、それは「我が親の個性（長短所）」だけでなく、人間性を幅広く認められる人になる」ことに繋がると述べ、実際に、卒園後も園に訪れる卒園者やその保護者も多くいると言う。「T 幼稚園で作った親友家族は、私たちの素敵な宝になっています」と述べられている。

近年の幼児教育や子育てにおける、「孤育」の問題は、私事化された社会の中で、また、地域の中で、子どもにおいても親においても、他者との関係性の分断による孤立化とその関係性の希薄に起因していると言っても過言ではないだろう。

第2に、互いに補い合って育ち合う生活環境づくりを掲げている。具体的には、幼児一人ひとりに多くの人に補ってもらうことによって、子どもが健やかに過ごせる環境づくりをしていると言う。誰でも、いつでも園に自由に参加できるようにすることである。このことを通して、親も子どもも皆んなが親しくなるだけではなく、人との関わりが楽しいことであることを実感し、互いに助け合う生活が自然に出来るようになるという。親子が



左の写真は2020年1月8日に行われた、「保護者研修会」の際の写真。右の写真は、1月10日の「スタッフ研修会」の際の写真。保護者研修会では、すでに卒園させてから15年以上経っている卒園者保護者夫妻も参加している。

共に親しくなることで、子どもはよその家にも親しく泊まれるようになり、「人間関係の幅が豊かに広がっている」ことにもつながると言う。

“女の子二人を育てている夫婦がいました。この夫婦は、トモエに来て、男の子達と遊んでいました。彼らは親しみを感じて、ある日のこと「おじさんの家に遊びに行っていっていい?」『いいよ!』ということになり遊びに行きました。その家に泊まることになり、その家のお父さんとお風呂に入ったり、みんなで夕食を食べたり、一緒に布団に入り本を読んでもらい眠りました。翌朝にはお弁当も作ってもらい、その家のお父さんとお風呂に入ったり、一緒に布団に入り本を読んでもらいその家の子どもと一緒に幼稚園に来ました。お父さんお母さんは、男の子と過ごせたことで、我が家の女の子との生活に広がりができたことを感じたということです。”

このような実践は、子どもは家庭の生活と園の生活との断絶を意識することなく、より大きな社会集団の構成員となる帰属感が生まれることになろう。また、「よその家に行き来する」社会的行動への挑戦は、子どもは多くの刺激を受けるだけではなく、子どもは他者の反応によって自分の行動の価値を自然と判断するようになる事にもなる。このような「よその家に行き来する」協同の子育て実践は、そこから獲得した知識の元手がこうした人間関係の実験によって蓄積されていき、自分の将来に向けた社会的理想を構築する基盤となろう。

第3に、人が好きになり自分を好きになる生活環境づくりを掲げている。T幼稚園では、「人が好きになり自分を好きになる生活環境創り」のために、子どもへの「スキンシップ」を大事にしている。

“T幼稚園の教師は、子ども達を、おんぶ、抱っこ、かたぐるまを、よくします。幼児期はスキンシップによって心が育つ時期なのです。子ども達は言葉ではなく、感覚で人の心を理解します。6歳ぐらいまでは、主に言葉ではなく、体で会話をします。ですから体でぶつかって関わることを大切にしています。(略) 幼児期から人と関わることを学習することが少なかった人は、自分の姿が見えず自分すら

好きになれないで苦しんでいます。私達は心の健康医学を目指しています。人の本当の幸せは、自分を好きになり、多くの人を好きになれることでしょう。人間の教育もここにあると自覚し、実践しています。”

第4に、豊かな感性を育ち、自分の可能性を信じる人になれる生活環境づくりを掲げている。T幼稚園では、「豊かな感性を育つ生活」を保障することに、最も大事にしていることは、「大自然の中で幼児期を過ごさせる」という事である。子どもは「ありのままを受け入れて生きている存在」であるがゆえに、大自然の中で幼児期を過ごさせる事が大事であると指摘している。それらの経験は、「美しいものを美しいと感じられる感性を養える」事になるし、「大きな自然に抱かれている感覚が育つと、優しさや思いやりが育つ」と語られている。

“人の心、自分の心を理解する感覚や色彩、造形、音楽、リズムなどをとらえる『感受性はどのように育つか』を考えると、親、教師が教えられるものではなく、乳幼児自信が生活の体験で身につけていくことが分かります。乳幼児期に、多くの豊かな愛情に包まれ、可愛がられ、自然の豊かな世界に抱かれて生活することで、豊かな感受性が育てられるのです。(略) 私達は、人間の教育力の限界を知っているから、「多くの人」と「自然」に助けを求めて、このような生活環境を創造しているのです。『人』と『自然』は、本来大きな快癒力を持っています。大いに用いたいものです。”

第5に、自然の中で心豊かに育つ生活環境づくりを掲げている。例えば、①7色に変化する空と雲、四季の色彩を表す山々を通して、自然の中の生活で素直さを育む事。②色彩・造形、音、リズムなどの基本的感覚を大自然によって育む事。これは、壮大な大自然は、「織りなす色彩美、造形美、音の美しさ、リズムの優雅さ」を創造してくれるので、どんなにプロの人間でもこれらは教えられないといい、自然の豊かさから学び得ること、また生活環境づくりを抱えている。③自然の恵みの中で遊ぶ子どもたちの目の輝きに魅せられるために、「自然が創造性を養う」ことを掲げている。④土、

砂、草、小枝を通して「五感をバランスよく育てて」行く事である。また、⑤四季、すなわち、春、夏、秋、冬のそれぞれの自然を通して育てて行く事を大事にしていると言う。

以上から見て取れるように、T幼稚園は、物理的な環境と同時に自然的・社会的な環境づくり実践の統合を目指している事が分かる。つまり、こうした統合された環境づくりは、学びの主体者である子ども（個体）は学習過程において出会う、さまざまな諸客体＝自然（石、風、動植物）、仲間と自分との関係に少しずつ親しむようになり、子ども自らが個人的で実験的な活動・世界に積極的な行動をとり、「直感」を伴う感性が育てていくものだと思う。

以上、T幼稚園における「生活環境づくり」実践の具体的な内容を検討した。

おわりに

本稿は、T幼稚園の幼児教育実践展開において核となる「生活環境づくり」実践の具体的な内容とその特徴を、園から提供された資料及び、2020年1月に行われた保護者・スタッフ研修会の傍聴資料を通して検討した。しかし、今回の調査では、T幼稚園の「生活環境づくり」実践の歴史的変遷とその過程内容を十分に理解していないために、すぐに結論に結びつけることは限界がある。このことを断っておきたい。しかしながら、このような限界性を伴いながらも今回の調査から明らかにされたことをあえてまとめると次のような事が言えるだろう。

それは、T幼稚園の幼児教育の中核にある「生活環境づくり」は、単に、物理的な空間づくりや一過性の子育てに止まらず、子どもを中核とした、教育主体者である大人（保護者、親、祖父母、卒園の子どもの親）による、協働的で活動的な「大家族」のような親密な関係形成づくり実践とその活動が大きな特徴であった。つまり、「生活環境づくり」を基盤とした、幼児教育実践は、子どもを中核に据えた、多様で豊かな大人同士の繋がりとその繋が

りによって、「互いに補い合って育ち合い」協同が、子どもの発達とその支援実践の最優先的な価値においてある事が明らかにされた。

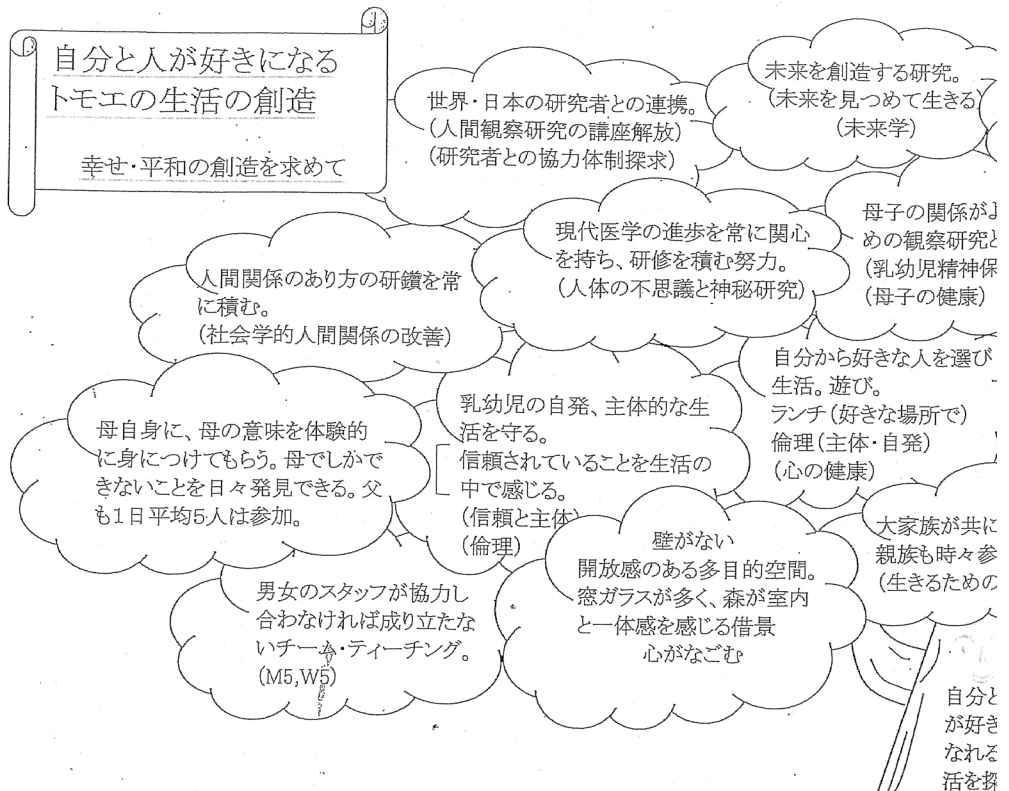
このような、響き合う幼児教育の原理とその実践は、子ども一人ひとりの成長・発達支援における断絶化（地域と幼稚園・学校との断絶）、不連続性（それによって教育主体者間の有機的な関係形成の希薄化）・受動性（それによる子ども自身の他者と深く関わる経験を減少させ、子どもも親も元気喪失を生み出すような事）を、豊富で意味のある連続性と協同性の実践に変えられる力強い基盤にあり、このことはどの幼児・保育・子ども教育実践にも貫かれるべき普遍的な価値であろう。

以上の点を踏まえて、今後は、T幼稚園における「生活環境づくり」実践の過去の実践に掘り下げ、その過去の実践がどのような過程をへて現在の実践と未来の実践に結びつけ、展望を描こうとしているのかを明らかにしたい。

最後に、T幼稚園における「生活環境づくり」実践のグランドデザイン・イノベーションの資料（P80～81 参照）を補足資料として示しておこう。ご参照されたい。

参考文献

- 文部科学省（2008）「幼稚園教育要領解説」、フレーベル館、pp.49-60.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2015）「幼保連携型認定こども園教育・教育要領解説」、フレーベル館、pp.63-71.「認定こども園概要」内閣府ホームページ.
- 学校法人創造の森学園札幌トモエ幼稚園（2005・06年度）、『人間の豊かな感性を養い、人間の尊厳を確立する基礎的人権教育の創造』文部科学省人権教育開発事業報告書.
- 高見茂・開沼太郎（2010）『教育法規スタートアップ』昭和堂.
- 川田学（2019）『保育的発達論のはじまり』ひとなる書房.
- 無藤 隆・大豆生田 啓友・松永 静子（2019）『教育・保育の現在・過去・未来を結ぶ論点 汐見稔幸』エイデル研究所.
- ジョン・デューイ著・加賀裕郎（訳）（2018）『確実性の探求—知識と行為の関係についての研究』東京大学出版.



命の誕生は、男女の信頼から生まれる
その命は、信頼されて人として育つ。
その信頼は、生きる喜びとなる。
*これらは、人間の基礎科学の土台

私(大人)は、子どもたちに何を残してきたのだろうか。何を残したいと望んで生きているのだろうか。

親の背を見て子は育つ

夫婦間で理解し合おうとする＝調和

待つことは愛。待つことのない愛は、愛とは言えない。
待ちすぎると無関心に変化していくもの。
人は過去を瞬時に残し、現在は瞬時に未来を創って生きている。
過去・現在・未来は一体で進む。だからどうする？

乳幼児が尊重される精神的環境をみんなで学び、創造する・常に学習し続ける

乳幼児期は、最も人として重要視されなければならない時。土台。
・神に一番近い人？

乳幼本能きな能力

自己を肯定しつつ生活できる人は
①信頼されている(人はそれを愛という)
②信頼は人の意志を尊重し待つ(大人の価値観を押し付けなくて、無二の親友として...)
③親から命の尊厳を感じられる

心地よい目、快を積み重ねつ。(当然、不

子どもは、大人から敬意をはらわれている度合いに応じて、自分の人格を意識し、自分の人間としての尊厳を自覚して自分自身を尊重ようになります。のちに、大人になってからの道徳的態度全体に影響を与えることになります。
(P・トゥルニエ)

人間の尊厳を園長自身が永な人間を思考

